

様（有栖川大総督宮）御出馬共相成候得者、一時御奉命之上に無御座而者、兼而之御旨意も相立申間敷と愚考仕候……」（在大坂の石原五郎右衛門より副藩の加藤直衛宛書翰、正月十八日付、『近世小田原史稿本』下巻）というようなことで、朝廷へも背くわけにもゆかないという苦しい立場に追いこまれて、結局勤王に傾くことになった。そこで前記の通達に対して家老加藤直衛から「今般、御親征被仰出候、依之為天下勤王可尽忠節哉、御迅問之趣奉拝承候、向後御用向被仰付候節、謹テ奉遵、朝命尽力出精励忠勤候外、於閣藩決テ二念無御座候……」という請書（翌二十七日付）を提出した（『東海道戦記』）。この勤王声明によって小田原藩は、佐幕を捨てて新政府に忠勤をあげむ勤王の態度をとることとなったのである。

箱根関所の占領

東海道軍の先鋒は、出軍に際して大総督府の駿府到着までは駿府滞陣するよう命ぜられていたが、参謀の西郷隆盛が、箱根を前にして駿府で滞陣するのは戦略上不利であるとして、ただちに出動を命じた。さらに輪王寺宮公現法親王が、徳川慶喜助命運動のために大総督府に来るといふ内報があったので、それを小田原辺で阻止しなければならぬということになって、軍議の末、大村藩の渡辺清が先鋒として少数の藩兵を率いて早足で箱根を越え小田原方面に出動することにして、箱根の関所にかかった。ここは小田原藩の守備なので、一騒動おこる予想で臨み、官軍の先鋒であるが、この関門をただ今受け取ると申しられると、何ら抵抗なく関所一切を政府軍側に引き渡して箱根関所の占領となった。渡辺は案外に思い、一応占領のうえとりあえず関所を小田原藩に預けることとして関東にはいつて小田原宿に着陣した（渡辺清「江城攻撃中止始末」―『史談会速記録』六八輯、この渡辺の箱根関所占領は東海道軍の関東入りの第一歩であるが、渡辺の話ではその日はつきりしない。このことは『復古外記・東海道戦記』には何らの記述がないが、二月二十八日の条に「是日総督、忠礼ニ命ジ旧ニ仍リ箱根関門ヲ敵守セシム」とあり、片岡の『明治小田原町誌』にも同日の条に右の記事を載せて関係文書を掲げている。もし渡辺が関所をいったん小田原藩に預けたことが右の『東海道戦記』の記載のことだとすると、渡辺の関所占領はそのときのことということになる。）。

大総督は三月五日、駿府城にはいり、先鋒両総督は先行して十日には沼津宿に着いた。これから箱根越えである。十三日には六浦藩主米倉昌言に対して横浜の臨時取締りを発令、さらに小田原藩に対して、先般、箱根関所の守備を命じたが、両総督の関門通過中は本軍の先鋒隊に屯衛を申し付けるといふ触令を発して、両総督通過中には大事をとっている。橋本総督は二十六日、関門を通過して小田原宿に入り、本陣久保田甚四郎を宿所とした。小田原藩は重役を三島宿まで派出し、小田原宿出立の際は戸塚宿まで見送らせている。

江戸開城と小田原藩

本隊の大総督宮は翌四月八日、駿府城を発し、十日、箱根宿に泊り、翌十一日、小田原宿に着陣した。小田原藩は橋本総督と同様の出迎えと見送りを行った。これより先、参謀西郷隆盛と旧幕府側の代表勝義邦との会談の結果、翌四月四日、橋本・柳原両総督が江戸城に入り、同月十一日、江戸開城が行われた。

江戸開城によって旧幕府の根拠地江戸の占領は完了して、新政府は江戸征討の目的を一応成就した。そこで、江戸府内の行政を旧幕府の手から接收して民政の刷新と治安の維持に当たった。しかし、翌五月には彰義隊の反乱がおこったことでもわかるように、新政府の占領政策はまだ極めて不安定なものであった。江戸のみならず、関東一円はまだ新政府の統治に服したわけではなく、各地に反政府的騒擾（さわぎ）が相ついでおこっている。この江戸とその周辺の不穏な空気が、房総から江戸湾を渡って相豆地方に飛び火をして、小田原藩をもその騒乱にまきこんだのである。

大総督府は閏四月九日、沼津宿に着陣すると小田原藩の重役に対して、房総地方に屯集の賊徒（遊撃隊脱走隊士ら）の残党が、相州浦賀、または伊豆辺へ渡海して、鎌倉・箱根方面に襲来（うご）の噂があるから、米倉藩・沼津藩・駿府城代・または横浜詰め肥前藩兵らと申し合わせ、油断なく探索して見当たり次第討ち取れ、という指令を発している。このように相豆地方へ遊撃隊残党襲来の風聞は、はやく伝えられて大総督府の耳にもはいつて嚴重警戒の手を打ったのである（『明治小田原町誌』は、小田原藩

の重役が駿府に呼ばれてこの命をうけたとしているが、大総督府はすでに駿府出發後なので、沼津における下命であろう。

三 箱根戦争と小田原藩

林忠崇と遊撃隊士

閏四月十二日、己の刻（午前十時）ごろ、足柄下郡真鶴港に突如、下総国請西藩主林忠崇と江戸の旧幕府陸軍遊撃隊脱走の隊士伊庭八郎と人見勝太郎の二人が手兵を率いて上陸した。この林らが小田原藩に対して徳川家回復の挙兵に協力を働きかけたのがきっかけとなって、ついに箱根戦争の勃発となった（林忠崇の「一夢林翁手稿戊辰出陣記」、『江戸』二七～三〇、『復古外記・東海道戦記』、ほかに『明治小田原町誌』）。

林忠崇、名は昌之助。林の家は代々徳川家の旗本であったが、父の播摩守忠旭が請西藩一万石の大名にとりたてられ、叔父忠交の後をうけて三代目請西藩主となった（「請西藩主林忠崇氏伝」―『旧幕府』三の六、笹本寅「林遊撃隊長縦横談」―『伝記』二の二）。

請西藩は明治元年の初頭、譜代藩として、京都政府の召命に応ずるか、主家に殉じて拒否すべきかの岐路に立って藩論が沸騰していた。さらに領地も不穏な状況であったので、その鎮圧のために林は木村隼人らの従者三名をつれて江戸を離れ、領地請西（現在 木更津）の陣屋に赴いた。これは三月八日の夕刻である。ところが翌四月の十三日に、突然、旧幕府の撤兵隊の福田八郎右衛門が兵三千余を率いてきて、徳川家回復のための協力を求めた。ついで二十八日には、伊庭・人見らの遊撃隊脱走の士三十余名がきて、これも撤兵隊と同じような申し入れを行った。林は当時二十一歳の青年藩主であったが、かねて主家への報恩の志があったので、伊庭・人見らと大いに意気が相通じて、ついに彼らとともに蹶起を決意して閏四月三日、請西の陣屋

を脱出して遊撃隊に加わった。

まず房総の譜代諸藩と連携をはかり、さらに相豆に渡海して、小田原・韭山方面の譜代藩、また幕領を動かして徳川家回復の目的を達しようという戦略を練った。この蹶起にしたがった兵力は譜代藩兵約七十人、遊撃隊士三十六名が主力で、ほかに諸藩の脱走人が参加して総勢三百名近くあったという。江戸湾沿岸を南走して館山に至り、そこから二艘の船に分乗して十二日、巳の刻に真鶴港に上陸した。第一の目的は小田原藩の説得であった。

林忠崇の小 この説得には林忠崇が当たることとして、単身入城、家老渡辺了叟らと対談してこの挙兵の盟主となることを田原藩説得 申し入れた。小田原藩としては佐幕の志はもちろんあったが、今その態度を表明することは、徳川家のために

かえって不利となるからしばらく時機を待つことにする、という婉曲な拒絶の態度を示した。これは小田原藩がすでに朝廷に忠勤を尽すという非佐幕の態度を明らかにしたばかりであったからである。林らは、小田原藩からこのような態度を示されたので、やむなく第二の目標の伊豆韭山の代官江川英武を説こうとして韭山に赴いたが、ここでも代官が不在で要領を得なかった。

相豆地方は、すでに東征軍の通過後で一応は安定していた。そこに遊撃隊の残党が上陸してきたのであったから再び攪乱される恐れがあったので、閏四月九日、小田原藩に対して前掲したような遊撃隊士掃討の指令を発したのであった。そこで小田原藩としては林らの申し入れにはどうしても応じられなかったのである。また、このような遊撃隊士の蠢動は、江戸の旧幕府側にとっても慶喜がすでに恭順の意を表した以上、はなはだ迷惑千万なことでもあった。そこで田安慶頼は、大監察の山岡鉄太郎に遊撃隊士の説諭をさせ、家臣の不穏な行動を何とか鎮圧しようとした。この山岡の説諭によって遊撃隊士は沼津藩預けの処置に服して、一隊は沼津城外香貫村霊山寺に駐屯して後命を待つこととなった。

大総督府は、沼津以東の鎮撫ちんぶのために五月六日、参謀の下に軍監四名を任命した。この軍監は各道総督府の下に設けられたもので、東海道軍では鳥義勇（肥前藩士）、中井範五郎（正勝、因幡藩士）、三雲為一郎（穂方、佐土原藩士）、和田勇（大村藩士）で、島を上総・下野二国、和田を沼津、中井と三雲の二人を伊豆・相模二国の担当とし、中井、三雲は小田原藩に根拠をおいた（『復古外記・東海道戦記』による。『明治小田原町誌』はほかに吉井頭三（土佐藩士）の名を挙げている）。伊豆・相模の軍監府は小田原におかれ、各軍監の下にそれぞれ府員若干名がいた（荻野山中藩士「松下祐信自伝草稿」―『荻野山中藩史料松下家文書』）。

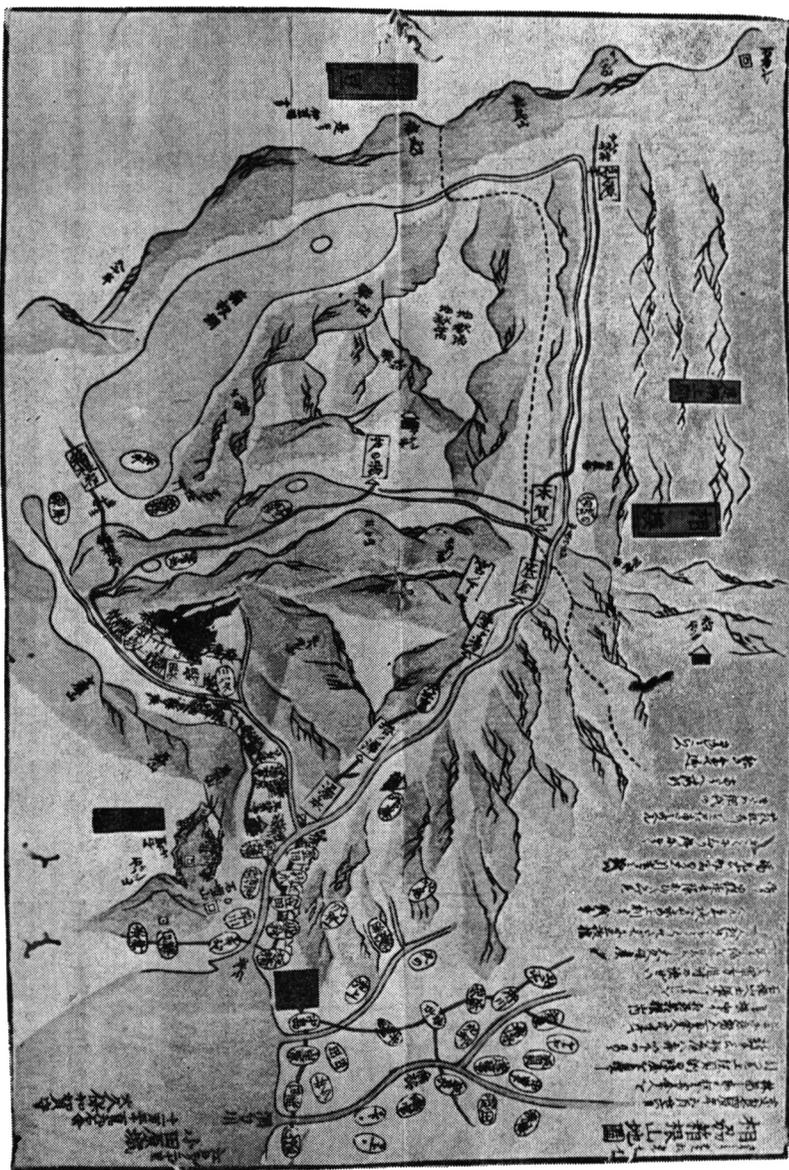
また同月十八日には、支藩荻野山中藩（藩主大久保教義）に対して伊豆地方に賊徒討伐の援軍出動を命じた。このころ、山中藩は勤王が佐幕か藩論沸騰していたが、勤王に決し政府軍に協力した。この態度が結局藩の運命を救って、後に嗣子岩丸が本藩主の永塾居えいじゅきよに代わって本藩を継ぐようになるのである。

箱根戦争の勃発

江戸では五月十五日、彰義隊討伐の上野の戦争がおこり、さらに関東各地にも佐幕分子の不穏な動きがあった。十八日、彰義隊討伐の報が達すると、軍監は呼応の動きを警戒して小田原藩兵に鎮庄の部署につかした。十九日の早朝、「すでに待機の場合ではない。彰義隊討伐の報を聞いた以上は、ここに因循と在陣もできないから、隊内に相談せず自分の独断で配下の一隊を率いて東海道筋に出動する」といい残して箱根をめざして出発した。これを知った林らは、人見の脱出は軍律違反であるが、もし人見軍が敗走すれば全軍の崩壊となろうと、ただちに残る隊士とその後を追うこととした。こうして林・遊撃隊士の総決起となった。このとき遊撃隊士は、第一軍隊長人見勝太郎、隊員六十五名、第二軍隊長伊庭八郎で隊員三十九名、第三軍は隊長和多田貢（岡崎藩脱藩）、隊員二十七名、第四軍隊長林忠崇、隊員六十名、第五軍隊長山高鍬三郎、隊員三十一名、その他で総計二百八十名であったという（『林遊撃隊長縦横談』による）。本隊は巳の半刻（午前十一時）

箱根戦争図

春日俊雄氏蔵



に香貫村を繰り出して一路箱根の関所に向かった。

関所の守備は江戸時代以来、小田原藩の担当で、このときは中津藩兵が加わって固めていた。まず人見が江戸表に用事があるので関門を通過すると申し出ると、守備側はこれを拒み、再三押し問答をつづけたが、ついに人見が大声で兵力で通過するとさげふと西の方から関門に向けて発砲した。これで火ぶたが切られてしばらく砲火をまじえた。双方互角で容易に雌雄が決しないので、この上は奇兵をもつて破ろうと遊撃隊の別動隊が裏路から関門わきに潜伏して侵入の機をうかがっていると、寅の刻（午前四時）過ぎに小田原藩兵側から、大音をもつて、「ちよつと話があるから、暫時発砲を止めたまえ」と呼んだので遊撃隊も発砲を中止し、先頭にいた隊士の前田条三郎が単身で関門にはいった。関兵は前田に向かつて、「今までは、大総督府の軍監がいたので、やむをえず空砲をはなっていた。もとより我が藩の本心ではない、今軍監を放逐した。このうえは君らに同心して徳川家の回復をはかろう」と述べた。前田は、「しからば関門を我らに渡せ」というと、「同意ならば何の否むこともない」ということになって、前田は進んで関門を受け取り本営にこれを通告した。これは翌二十日の辰の刻（午前八時）ごろであった。こうして戦闘はあつげなく終わったのである。このような意外の結末となったのは、小田原藩側で急速な藩論の転換があつたからである。

藩論の急転換

この藩論転換の経緯は諸記録によるとおおよそ次のようなものであった。まず藩当局の態度であるが、王政復古政変に当たつて小田原藩は佐幕か勤王かの岐路に立つて苦しみ、大勢に押されてついに勤王を声明して東征軍の通過を迎えたのであつたが、現藩主忠礼は前將軍慶喜の従弟に当たるなど、徳川家との密接な関係からなお容易に佐幕を捨てきれないものがあつて、藩士中にはなお佐幕の空気が濃厚で、家老の渡辺了叟がその頭目であつた。城中は和戦の両論が沸騰して重役の命も聞かれないという紛糾のあげく、結局、佐幕に傾いて遊撃隊と同盟して籠城策をとることに決定し



遊撃隊第2軍隊長伊庭八郎
『江戸』2の2から

た。

そういうところに江戸から意外な情報がいった。それは、徳川家の回復になったという話であって、徳川慶喜が軍艦で下田に来ておつて不日小田原に入城するはずとか、大久保彦左衛門が指揮する三千人が藤沢に乗り込み、藤沢宿・馬入辺に彰義隊三、四百人がきているとか、また、奥羽の軍勢、会津、仙台はじめ都合十一藩の兵およそ九万人ほどが江戸に向かい、たまたま利根川筋の洪水で停滞しているが川があき次第繰り込む。またいよいよ開戦となれば上方勢は、林忠崇と韭山勢、沼津勢が合体して東征軍を富士川でくい止めるというようなものであった(『明治小田原町誌』所収「片岡家御用留」)。

もとよりこれはとんでもない虚報であったが、遊撃隊士の急襲で腰の浮いた藩当局は、この作為にひっかかって、大久保家は譜代の家臣といった名分論をよりどころとして一挙に佐幕へと逆転し、遊撃隊士と和議が成立して手をにぎり、二十一日には遊撃隊士百四十余人が小田原に繰り込んだ。

このような小田原藩の藩論逆転のために、関所にいた軍監中井範五郎は二十日朝、援兵を求めするために早追いで小田原に向かう途中、権現坂で遊撃隊士に行きあって殺害され、また小田原にいた軍監三雲為一郎も驚いて難を避けようと、酒匂川に逃げて舟で川を渡ろうとしたところを小田原藩兵によって銃砲で威嚇された。

このような佐幕への逆転は、小田原藩を死地に追いこむものでしかなかった。江戸でこの報を開いた小田原藩監察の中垣齋宮は驚いて、二十三日早駕籠で急ぎ帰藩し、遊撃隊との和議はまったくの虚報によるもので、これは藩主家と一藩を誤るもの

と説いた。城内はいったん遊撃隊士と和議を結んだものの、なお勤王佐幕の両派があって、小田原藩は最後まで曖昧の域を脱していなかったのである。そこに中垣齋宮から、これでは朝敵となるのみならず、前將軍のためにも罪人となるという大義名分論がでたので、再度勤王へともどって藩主忠礼もその諫言かんげんをいれ、渡辺了叟りゆうそうらを退け遊撃隊士と断絶して謝罪降伏に決した。そこで忠礼は翌二十四日、謹慎の意を表すために城門をでて、大工町の菩提寺ぼだいじである本源寺にはいった。

戦禍と町民

小田原藩は、このようにして遊撃隊士と絶縁したので城下は戦火に見舞われることをまぬがれた。しかしそれでも一時町民は、はげしい戦慄せんりつを味わったのである。町年寄片岡家の御用留によると、箱根の関所で戦闘がはじまった十九日には、早鐘はやかねが打たれ、町中の小前の者は荷物を片づけ、二十二、三日ごろから老人子どもらが立ち退きだした。また土蔵は火災予防のために目塗りをしたり、荷物を運ぶ者などで城下一帯が混乱した。とくに藩主夫人が城外久野村の総世寺に避難の長持類を運搬するのを見た者は、驚きを新たにして、なかには大砲をおそれて、いったん目塗りした土蔵内の品物を持ち出して他所へ運ぶという騒ぎにまでなった。関所の戦闘は前記のようにあっけなく終わったのであるが、藩当局の二転三転のあげく遊撃隊士追撃の小ぜりあいがおお二十五、六日ごろまでつづいたので町内の不安はしばらくやまなかった。このような戦火の混乱によって、町民の家業がとどこおったので、藩当局は新蔵の玄米千俵を放出した。これは町人別五千

四百人に一人七升八合ずつの割り前とあった。

小田原藩は、藩論再逆転で遊撃隊士一派と絶縁することとなったので、その代償として黄金、小銃などを贈った。まことに苦肉の策であるが一遊撃隊士同調の脱藩士の記録に「総督府、のち大に兵を出して我を討たんとし、二十三日、江戸を発す。

小田原藩大に懼れて西軍（政府軍）に降り、請うて先鋒となり我を討たんとす。我軍いまだこれを覚らず、二十五日、我藩士（請西藩士）小田原藩に到り盟を致んとす。而して小田原藩人反覆の状あり、伊庭八郎、岡田斧吉、天野豊三郎等、小田原城に

入り之に抗議す、藩（小田原藩）の有司首鼠兩端、金千五百両、玄米二百苞、酒二十駄、器械彈藥銃丸等を我に贈与し、事僅に止む。八郎笑ひて曰く、反覆再三、怯懦千万、堂々たる十二万石中、復一人の男児なきかと……」とある（小島茂男前掲書引用「岡崎藩士戊辰戦争記略」）。遊撃隊士側からすれば、この評は当を得たものであろう。しかし、箱根関所の守備を命ぜられた譜代の大藩の立場の苦衷もまた察するに余りあるものがある。

小田原藩から絶縁を申し渡された遊撃隊士は当初の計画がごとく齟齬したので、二十五日、箱根山方面に引き揚げ、これを小田原藩兵が追撃し、隊長の伊庭八郎が負傷するというような痛手をこうむった。二十七日、芦の湖畔を経て熱海に達し、薄暮、網代から船で房州館山に引き返し、ここで傷病兵の始末をして旧幕府軍艦長崎に搭乘して奥州へ向かった。林忠崇の一隊は小名浜に上陸して旧幕軍に合流し、会津若松、米沢方面をまわって仙台に至り、九月二十日、輪王寺宮も謝罪したということを知ってついに降伏を決意した。

問罪使の派遣

大総督府は、箱根戦争の報に接すると、ただちに小田原藩をその責任者として参謀穂波経度^{つとむ}を問罪使総督に任じ、下参謀河田佐久馬、三雲軍監らを随員に命じて派遣することとしたが、あらかじめ中井軍監殺害と三雲軍監追い返しの罪を問うための問罪派遣を申し渡しておいて五月二十五日、大磯宿において回答せよと命じた。そこで小田原藩は家老渡辺了叟、年寄山中湊、大目付中垣齋宮を平塚宿に派して問罪使の一行を迎えさせた。大磯宿において家老岩瀬大江進らが河田下参謀に藩主忠礼の伏罪の哀訴書と答弁書とを問罪使に差し出した。

尋問に対する藩当局の答弁内容は、(一)軍監中井範五郎の殺害については、遊撃隊士富樫記一郎の従僕が字権現坂にて殺害したので、これはすでにその筋に届け出である。(二)軍監三雲為一郎追い返しの一件は、中井軍監殺害があったので、三雲軍監に万一危険があつては、という家来どもの計らいで避難せしめるため、決して当方が追い返したのではない。さらに先般、林